

TOPICS  
4

# トピックス…④ 価格高騰に対応する 飼料原料調達の変化

畜産の飼料原料の多くを輸入に頼っているわが国では、主要輸出国である米国の干ばつなどによる国際市場価格の上昇が、国内の飼料価格に直接反映する構造となっている。とくに、2006年秋以降のとうもろこし価格の上昇に端を発する飼料価格の高騰は、畜産経営に大きな影響を及ぼした。こうした状況の下で、飼料原料を安定的に調達するための新たな取組が進んでいる。

## 飼料原料の使用量比率の変更

飼料の価格と供給の安定を図るために採り得る手段としては、原料使用量比率の変更と原料調達先の多様化がある。2012年度上半期における配合・混合飼料の原料使用量比率をみると、最大のとうもろこしは前年同期より22ポイント減の43.2%、続いて大豆油かす12.6%（前年同期比1.0ポイント減）、こうりゃん6.0%（同0.4ポイント増）、菜種油かす4.7%（同0.5ポイント増）、ふすま4.1%（同0.1ポイント増）、小麦3.9%（同2.8ポイント増）の順となっている。

とうもろこしの使用量比率は、2005～08年度に49%台であったが、その後、高水準の価格などを反映して減少傾向で推移している。2012年度上半期は、6月後半から発生した米国中西部での大規模な干ばつにより、とうもろこしの国際価格が高騰したため、これまでの減少傾向がさらに強まった。また、大豆油かす相場も、中国の旺盛な需要、南米産大豆の減産、米国産大豆の作付面積の減少などを背景に、2011年度下期以降は上昇傾向にあり、使用量が減少した。一方、飼料用小麦はとうもろこしの代替品として豪州からの輸入が増加し、使用量比率が大きく高まった。

## 飼料原料の調達先の多様化

先に述べた飼料原料の使用量比率の変更は、どちらかという対症療法的対応といえる。国際市場での相対的な価格変動に

よって、使用量比率の再変更を余儀なくされるからである。これに対して、調達先の多様化を進めることは、使用量比率の短期的な変更を回避できるばかりではなく、調達価格を抑制できる可能性を高める。

財務省「貿易統計」によると、2012年度のとうもろこし輸入量は、4～6月にウクライナ産、7～9月にアルゼンチン産、9～11月にブラジル産が月10万トンを超えており、これまでの米国産一辺倒の輸入から、東欧や南米といった調達先の多様化が加速している。

また、飼料用とうもろこし輸入量は、2012年6月以降、国際価格高騰の影響で減少し、月70万トン台で推移していたが、10月に80万トン台に回復した。11月の輸入量は前年同期比58%減の88万トンで、国別で見ると、ブラジル産が49万トン（全体輸入量の55.4%）、米国産が37万トン（同41.8%）であった。米国産とうもろこし輸入量は、引き続き減少している。

ブラジル開発商工省によると、干ばつによる米国産とうもろこしの価格高騰により、同国からのとうもろこし輸出量は2012年7月から急増し、8～11月の4ヵ月連続で単月の輸出量が過去最高を記録した。11月の輸出量は前年同月の33倍で391万トンとなった。日本向けの輸出量は、9～11月の3ヶ月間で100万トン弱に達した。

わが国の飼料用とうもろこしの国別輸入量

